

ポケットモンスター虹 ～SevencolorS Gate～

裏腹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、空に七色の輪が現れた。

Reオーラという謎の物質で形作られたその門の向こうにあるのは、ラフェルなる世界で紡がれた数々の物語。

でも、それらは——ページが破り捨てられた本のように、ぽつかりと続きが途絶えていた。

遙か遠くの空間と、果てしない時間を超えて送られた、異世界からのSOS。

ヒーローが不在の世界を救えるのは、貴方と、その子だけだ。

※こちらはTwitterにて行われている、ポケットモンスター総合二次創作企画『ポケットモンスター虹』の作品になります。

基本設定、人物等の詳細はこちらのアカウント《@PokemonNIZiver》の固定呟きにて。

又、こちらは『RPG風ゲームノベル』の形式を取り、参加者が展開を決めることが出来ます。

参加方法等はこちら↓
【<https://twitter.com/PokemonNIZiver/status/1174663807358005248?si=20>】

目次

岩窟王の記憶

01.	人獣の邂逅	1
02.	岩窟王	17

岩窟王の記憶

01. 人獣の邂逅

ポケジョブ——別名『ポケモン職業紹介所』。
ラジエスシティに存在する、トレーナー向けの労働を斡旋してくれる公的機関である。

企業、個人は勿論のこと、長期、短期、日雇いも問わず様々な求人が出されるその性質は、寧ろ依頼所に近い。

利用者は主に資金を必要とされる旅のトレーナーが多く、得意なポケモンの経験を費用稼ぎに活かせるという事で、彼らにとっては非常に画期的なシステムだ。

「…いよし！ とうちやーく！」

田舎町「オレントタウン」から繋がる17ばんどうろを西へ西へと進んで、突き当たる山岳地帯。

人の手で整えられた道を塞いで連なる高い山々は、ついさつきまで左手から望めていたラフェル洋の青さも忘れさせてしまうほどに、荘厳なものであった。

『この先、危険！』親切だった遊歩道のガイドが途切れると、麓で立て看板が警告した。

「上等……危険の『険』は冒険の『険』、危ないの恐くて旅なんか出来ないわよ！」

聳える緑はまるで、特撮映画に出てくる巨大怪獣のよう。

されど恐れぬ旅人「シイカ」は、肩に乗るモモンガポケモン『エモンガ』と共に、威勢よく山頂を指差した。

自然界の縮図、人獣共存の理由、ポケモン達のラジエスシティ——様々な呼ばれ方をするこの地は「シエトの峡谷」なる正式名を取る。

険峻さが織り成す長く苦しい道は、最後のジムを目指す者ならば避けては通れない。

だが今回、シイカがトレーナーの試練場に訪れた理由は、単なる冒険、というわけではない。

「にしても、遅いなあ。あたしが早すぎたのかな……」

詰めるだけ詰められてパンパンに膨れたリュックからガサゴソと取り出すのは、ポケジョブで受けた求人の詳細が記された依頼書。

『9月15日午前10時、シエトの峡谷のオレント側入り口前にて待ち合わせ』

依頼主は「ラーレ」という人物らしい。なんでも自営業のシステムエンジニアだとか。

「……うん、合ってるよね。ちゃんと五分前行動だし、早過ぎなんてことはないはずんだけど」

きよろきよろ周囲を見回しても、シイカを除いて人はいない。

「だれかー！ いませんかー！」山の方へ大声で呼びかけてみても、無音だけが寝そべって、小首を傾げる彼女を置き去りにするばかり。

「つかしいなあ……一緒に依頼を受けた人もいるはずんだけど、全然見当たらない——」

「だれかー………！！」

「………！」

そのリアクションは、タイムラグがあった。

やまびこと呼ぶにはあまりに再現度が低すぎる男の声が、近くの茂みから聞こえた。

ただ事ではまず出ないであろうその声色を悟ったシイカは、迷わず峡谷内へと飛び込んでいく。

「………いたー！」

「助けてくれー………！ 大自然にころされるー………っ！！」

葉掠れの音を振り切り、木漏れ日のカーテンを抜けた先で、声の主はいた。

山道にて伏し、丸くなる男。そして彼を囲んで次々と攻撃を加えるポケモン『アブソル』の群れ。守って立ち向かう白のイーブイは、恐らく彼の手持ちであろう。

しかしろくな指示もないので、まるで戦えていないばかりか、傷だらけだ。

シイカはそれだけで自分が何をすべきか、理解した。

「エモンガ、お願い！」

『もももーっ！』指さすために伸びた腕の上を駆け抜け、ジャンプし、テイクオフ。

カタパルトの要領で発進したエモンガはその勢いで戦闘に乱入、まるで戦闘機のように、

「＼10まんボルト＼！」

アブソルたちに挨拶の電撃を浴びせる。

それは迸ってバチイン、と小気味よい音を立てたものの、決定打たり得ない。立ち直る唸り声言っている。

「き、君は……！」

「早くイーブイを下げて、あたしの後ろに！」

「わっ、わかった！」

視線がエモンガに集まった。構わず追撃に＼10まんボルト＼を放つが、これもまた倒すには足りない。

「強い……！」

エモンガの育成不足だろうか。いや違う。

これもまた、シエトの峡谷が人々に避けられる理由であった。

過酷な自然を生き抜いているため、必然的に生息ポケモン達のレベルが高いのだ。一般人は当然のこと、半端なトレーナーでも太刀打ちできないほどの個体ごまんと居る。

「じゃあ、これはどう!？」

頬で電気が弾けた。

「このかわいさに痺れなさい！」

そこから一気に急降下。それ即ち、射程外からの攻撃を諦めた証明。

地面すれすれで駆ける飛翔体を迎撃せんと＼サイコカッター＼が放たれた。

「当たるもんですか！ いけ、ほっぺすりすり！」

何度も何度も、すり抜ける。

矢継ぎ早に放たれる三日月状の刃をアクロバット飛行で回避し、肉迫。果てで当てるのは雷でも拳でもなく、頬であった。

弱い電気でも、密着して流し込めば相当な効果が期待できる。例えば、痺れを起こすことなど、雑作もないことだろう。

技「ほっぺすりすり」は、対象に状態異常『まひ』を付与する技であった。

一体に頬擦りすると、その躰を踏み台にジャンプ、もう一体に取り付き電流を奔らせる。木から木へ飛び移るモモンガの習性が存分に発揮され、もれなく不自由を強いられるアブソル。

「よし……い！」

が、敵の全てをまひ状態にして喜ぶのも束の間、アブソルは苦し紛れで再度「サイコカッター」を撃った。

シイカが訝るのは、その行き先がエモンガとは程遠い明後日の方向だったからに違いない。

すぱん。悲鳴を伴って、道の脇の樹木が一本、切り倒される。アブソルたちはそれに群がったかと思えば、一斉に樹冠に頭を突っ込んだ。

なんだろう。一体何をやる気だろう。

「……木の実!？」

次に目が合った時、答え合わせは成された。

白毛の獣たちが啜えていたのは、赤く熟したクラボのみ。

食せばまひ症状を治癒できる、大自然の恵みだが――。

「嘘でしょ、知ってて使ってるの……!!?」

野生の範疇を逸脱した知能の高さに、驚きを隠せなかった。

そんな少女の表情もお構いなく、折角の攻撃をふいにするアブソルたち。

果汁滴る牙を剥き出しにし、嘶いた。

咆哮に呼応するように増えていく仲間。伴い大きくなる群れ。

唸って吼えて、そして言う――『これが自然の力だ』と。

「くっ……い！」

野放しの獣の脅威を知った時には、もう遅い。

自分を困う輪が、出来ていた。

エモンガと一緒に構えるシイカ。どうにかして退路をこじ開けね

ば。戦い続けるのは、明らかにまずい――。

「――ナイトバースト！」

今にも飛び掛かろうとした瞬間に、その声は響いた。

あろうことかシイカを包囲するアブソルのうちの一体が、突如として他のアブソルに攻撃を加え始めたではないか。

「何……!?!」次々続く闇色の波動で、獣の檻が崩れていく。

急すぎる眼前の展開に啞然とし、瞬きを繰り返しているうち、奇行に走るアブソルが、本当はアブソルでないことに気付く。

「ぞっ、ゾロア!?!」

それは特性「イリユージョン」でアブソルに成り済ました、黒い子狐。

変装を解くやいなや『ぎやう!』と強く吠える。

「今だ、こっちに――」

「!……うん!」

倒れたアブソルの向こうで、オレンジの髪の少年が手招きする。発声を合図にゾロアが駆ければ、もはや説明は不要だろう。

シイカは彼らの誘導に従い、縮こまって伏せるだけの男を連れ、その場から一目散で離脱した。

「一体、何のつもりですか?!」

逃げた先の岩場で、叫び一歩手前の叱責がびりびりと響く。

仰天し、たまらず飛び立つ鳥ポケモンの群れ。休憩を邪魔してしまった。

シイカはばたばたとした忙しい羽音に一瞬だけ気を取られてから、再度男の方へ向き直る。

「まともな指示もなしに、ポケモンだけを前に出して戦わせるなんて……あなたの盾じゃないんですよ!?! それでもトレーナーですか!」説教が行われていた。

いい歳をしたうだつの上がらなそうな長身瘦躯の男が、一回りも小

さな年若い女性にがみがみ叱られる。傍目から見ても不甲斐ない光景だ。

「だ、だから、ごめんって」日常的な猫背をさらに丸めて、セツトもされていないぼさぼさの頭をかく。続く言葉はとて小ぶりで、やっぱり頼りない。

「アブソルはあまり人前に現れないポケモンだから、テンション上がってついつい追いかけてしまったんだよ。本当は単身で峡谷内に立ち入る気はなかった。許してくれ……」

「まったく……シエトの峡谷は危ないってことで有名なんですから、次からは気を付けてください」

「まあまあ、いいんじゃないか？ 本当に悪気があった訳ではなさそうだし」

「で、でも……」

そこでシイカに待ったをかけるのは、オレンジの髪の少年。

イーブイの手当てをしながら、彼をフォローする。きつと見かねているのだろう。

「それにさ、あそこで悪気を持つようなら、ポケモンだってこんなボロボロになるまでこの人を守らないって。……そうだよな？」

包帯を巻きながら、イーブイに語り掛ける。やたら手際がいいのは、旅慣れの証拠だ。

一通り手当てを終えた後、イーブイを男の元に返して「こんなもんなかな」と立ち上がると、二人からの礼をまとめて受け取った。

「助かりました……あなたとゾロアがいないと、どうなっていたことか……」

「いいってこと！ 迂闊に飛び出さず、木陰から様子を窺っていて良かったよ。結果的に出てきた応援に、自然な形であいつを紛れさせることが出来た」

「いや、あれは本当にすごかった！ 特性のイリユージョンを用いた変装と、そこからのド派手な種明かし！ まるでスパイ映画のクライマックスさながらだ……！ 僕は感動したよ、ゾロアにあんな戦い方があるんだ、とね！」

「調子良すぎないかあ……?」

鼻息を荒くし、先ほどまでのしおらしさが嘘のようにべらべらと語る、そんな男の振る舞いに困惑しつつも、少年はカバンのベルトを肩にかけ直す。

それはいかにも別の場所へ行き、用件を足す、といった風であった。

「じゃあ俺、待ち合わせがあるから」

「……ダイさん?」

「……へ?」

身を翻し数秒、知るはずもない相手から己の名を呼ばれ、固まった表情で振り向いた。

……冷静に考えれば、人がいることさえ稀なこの場所で、二人もの人物とエンカウントすることを、まず疑うべきだった。

「……そういう君はもしかして、シイカさんだったりしちやったりしちやわなかったり……?」

「ええ!? き、君たちがそうなのかい?」

「まっ、まさかそのリアクション……!」

「ひよっとして、あなたがラーレさん!」

『ええ……!?!』用意された必然は、偶然というお膳立てによって、回り出す。



『シエトの峡谷で、伝説のポケモン探しを手伝ってほしい』

ポケジョブでダイとシイカが受けたその依頼こそが、ラーレのものであった。

奇妙な巡り合わせで結成されたパーティだったが、さすがにもう慣れたか、会話も途切れることなく進んでいく。

歩みも同様。足並み揃えて、ちゃんと進んでいる。

「なるほどね……ラーレさんは戦えないから、俺らみたいのを必要としてたってことか」

「その通り。僕は沢山のポケモンを持って……失礼、全てのポケモンを所持しているんだけど、恥ずかしながらバトルは本当に下手くそでね。シエトどころか、そこらの野生のポケモンにさえ満足に勝てないと来ている」

「どうやってポケモン集めたんですか……」

「そりゃあ、シヨップから購入したり、育て屋さんからタマゴを譲ってもらったり、こうやって君たちみたいな人にお金を積んで捕獲してもらっているのさ。オシヤレボールなんてのはまさに君らの出番！お世話になつているよ」

朽木や枯草、落ち葉で作られた、でこぼこの坂に行く。

「しかし、きついな……心臓が破れそうだ……」

「弱音は吐かないようにしているけれど、噂通りの過酷さね……」

舗装されているだなんて、甘い見立てでしかない。

伸び放題のつるは時として足が引っかかりそうになるし、角度の激しい斜面は健脚がなければ滑落は免れない。

いくら旅人いえど、ダイもシイカもここに踏み入るのは初めてで、予定調和のように苦しめられる。シエトの洗礼は想像以上だ。

「おーい、こつちこつち！ これぐらいでへばっちゃいけないよ、まだまだ先は長いんだから！」

「いつの間に先に!?!」

「つていうか、なんでラーレさんだけポケモン使ってるんですか!? ずるいですー!」

「人間き悪いなあ、自分のポケモンに助けてもらってるだけじゃないか。それに、こいつは一人用！ 二人以上が乗ると重たいのさ。それじゃあ、お先に!」

山にあつては山が助く。言葉通り、山岳を住処とする『サイドン』の力を借り、ラーレはさつさと急いでダイとシイカを置いてけぼりにする。

男の身勝手さに、唇をわなわなとさせる少女。

「お、落ち着けて、悪意がある訳じゃないんだし……!」

「無自覚なら余計にダメでしょう、こんな自分勝手！ 少し言ってや

ります！」

さすがに二度目のフォローは機能しなかった。

シイカは憤って、サイドンの足跡を辿ってずんずんと奥へ進んでいく。

緑をかき分け、石を乗り越え、やがて途切れ、行き詰まる足場。

背中を向けたまま佇むラーレに「ちよつと！」と乱暴に声をぶつけ、彼の隣に立つ。

「……………」

その直後に、体は固まってしまった。

「わあ……………」

断崖絶壁の向こうで広がる、グリーン化粧をした巨大な土壌の塊。自分の何千倍もある、山、山、山。

それらが形作る谷という景色は、途方もないほどに広くて、深淵で、なんだか神秘すら眠っているように思えてきて。

際限なく流れ続ける水の音。きつと河川のものだろう。

木霊する数多の獣の鳴き声。恐らく住民のものだろう。

風に土の香りが乗ってきた。地溝から飛び立ったワシボンたちが、遥か高いスカイブルーへ昇っていく。

「綺麗……………」

「……………」が未だ人にとって厳しいのは、英雄ラフェルが敢えて開拓しなかったことに由来する。どうしてかわかるかい？」

「いえ……………」

「誰も彼もが寄り添いたい訳じゃない。中には近すぎない位置を取って、人間と適度な距離を保ちたいポケモンだっている——ラフェルはそういう存在を尊重し、多様な自然環境を内包したこの場所を、ポケモンだけの住処として残したのさ」

視界に圧倒され言葉を失ったシイカを、我へと返すラーレ。

「手付かずだからこそ得られるものがあるし、見られるものがある。

……………そう考えると、何か起きそうな気、してこないかい？」

出会える保証なんてないし、そもそも存在の根拠だって、ない。

伝説のポケモンを探すなんて、よくよく考えれば馬鹿げている。ま

ともならばまず受けない。徒に疲れる悪戯だと吐き捨て、無視をする。

それでも、彼女がこの依頼を受けたのは。

「……なんだか、わかる気がします」

心が躍ったからに、他ならない。

「ガキみたいってわかつちやいるけど、やつぱりいくつになってもわくわくするんだよなあ……こういうのってさ」

「ダイさん……」

何もないなんて、見ないと決められない。凄いものだと思いたつて、行かないと分からない。

迷惑で、実に賢くないが、仕方がない。辟易する頃には、既に足が進んでいるのだから。

「——ある冒険者は、ここで『四本足で歩く、立派な二本角を生やした無骨な体躯のポケモンを見た』と言った」

未知という字面だけで、魂が燃える。

「それは『牛のようだった』とも『岩のようだった』とも伝えられている」

未開という事実だけで、胸が高鳴る。

『猛獣に見えた』という話もあれば『剣を構えた戦士に見えた』という話もある」

その目で確かめないと気が済まない、トレーナーの性を思い出す。生まれた時から決めていた。きっと彼らは冒険者。

やがてダイも追い付くと、ラーレは二人へ向き直り、再度依頼内容を告げる。

「改めて、お願いしよう。この地で眠る伝説のポケモン『テラキオン』を、一目拝みたい。手伝ってはくれないかい？」

「……勿論です！」

「今更ですよ。俺達だって、そのために来たんですから」

シイカとダイは、輝く瞳にシエトの絶景を焼きつけ、静かに、そして大きく頷いた。

交わす握手は固く確かで、実に強いものであったという。

右を向いても、左を向いても、立ち並ぶ樹木。

ひとたび入れば迷ってしまい、魔物になるまで——即ち死ぬまで出られない、などと云われるこのエリアは『魔の樹海』という呼ばれ方をしているとか、なんとか。

塔よろしく背を伸ばし、苔にまみれた様こそ、紛うことなき原生林の証明で。

揺らぐ木の葉が、日向の形を自在に変える。

「よつと」

ラーレは腰ぐらいの高さの岩の上に、ノートパソコンを置く。何やらくぼみがある外付けデバイスが取り付けられており、そこにモンスターボールを嵌め込むと。

「どうもありがとう、サイドン」一瞬にしてどこかへ消失する。

「消えた!?!」

「転送さ、こんな感じにね」

タッチパッドでパソコンを操作すると、今度はそのくぼみに別のモンスターボールが現れた。

手に持つて開ける。中から顔出したのは、コンパスポケモンの『ノズパス』だ。

「す、すごい?!?!? 手品ですか?!? なにこれ?!?!?」

「ははは、新鮮なりアクションをありがとう!」

「……預けて、引き出した? ボックスみたいだ……」

「ご明察だ」

カチリとデバイスを外し、二人に見せる。

「こいつは『ノートボックス』。ノートパソコンでもポケモン預かりシステムが利用できる、優れものさ。これとノートPCさえあれば、いつでもどこでも手持ちを変えられる……実質全てのポケモンを持ち歩いていることに等しい。試作品ではあるんだけどね」

「すげえ……何者なんだ、ラーレさんって」

「なに、ラフェル預かりシステムの管理人というだけだよ。何一つ凄いことじゃあない」

「いやいやいやいや!! ポケモンコレクターよりもずっと自慢できることですよねそれ!?!」

システムエンジニアという肩書を、腑に落とす。
トレーナーの世話になりながら、トレーナーの世話をしているということだ。

世の中上手く出来ているな、なんて考えながら、いざ探索。

「……いや、待った」

「ダイさん?」

「どうしたんだい、そんな神妙な顔し……て」

そうやって顔を上げた三人が目の当たりにする光景は、異質さを知るには十分すぎた。

「なんだ……これ」

樹木の一本が、へし折られた状態で横たわっている。

「野生の喧嘩かな。まして整えられていない場所だ、こういうことは往々にしてあると思うけど……」

「……にしても、だ。この太さじゃ、折るのも相当苦勞するだろうに……」

ダイが不審がったのは、そこだ。

人の手が加わっていない、生まれたままの姿で伸び伸び育った分厚い木が、そう簡単に破壊されるはずがない。たとえ野生ポケモン同士の争いであったとしても——ここまでの攻撃性は、過剰と言える。

「それに、断面を見てくれ」

「はい、ギザギザしてますね」

「そうじゃなくてな。あからさまに煙を吹いてる」

歩み寄って触れれば掌に伝わる、痛みにも似た熱。これはまだ、この木が折られて間もないことを示している。

「え……えつと?」

「何か高熱のもので、焼き切られたということかな」

「断面周りの焦げ痕から見て、炎? でも黒ずむ箇所に偏りがあり過ぎる……継続的に焼かれて強度を落とされたものじゃない。もっと大きな火力を、瞬間的にぶつけられている気がする」

「つまり、ど、どういうこと?」

「痕跡から推測される攻撃が、変なんだ。この威力は敵意ってより、どっちかって言うのと殺意みたいな」

「……必死になって攻撃するほどの、何かがあった?」

少し黙りこくってから練り上げたシイカの言葉を、短く肯定。

ダイは不気味なほどの静寂に背筋をくすぐられながら、さらに不安の種を発した。

「ただそれより、俺達がまず気付かなくちゃいけないことがある」

一つは、ほんの少し前にも、ここで何かしらが起こったということ。もう一つは、この攻撃が野生ポケモンによるものであるということ。

そして、最後。

——野生ポケモンが優先されるべき此処にあつては、いかなる善性を備えようが、人など外敵でしかないということ。

「伏せてッ!!」最初に気付いたのは、シイカだった。

直感、或いは虫の知らせ、というものだろうか。誰よりも敏く、早く、出し抜けに迫った危機を察知し、回避した。

真っ先に瞳に飛び込むのは、黄色い閃光。遅れて来た音が、聴く者の鼓膜を戦慄させる。

それは獅子の咆哮さながらの震えを以て、堂々と正体を明かした。

「うわああ~~~~~~~~ッ、耳がキーンとするううう……!」

「雷……!?!」

極太の雷電だ。ダイとシイカはそれが頭上をすり抜けたのを確認し、立ち上がる。

続いて眼前に躍り出る唸り声は、電光ポケモン「ルクシオ」のもの。

「あれはルクシオだ!! 電光ポケモン、鋭い爪の先には強い電気が流れており、ほんの少しかするだけで相手を気絶させる! 四足哺乳類のヤマネコをルーツに持ち、樹林帯では凄まじい機動力を発揮する! ここにいるのも領けるし、さっき出した技は恐らく「かみなり」だ!」

「さすがポケモンマニア、ピンチでも饒舌……」

「ちなみに凶鑑原文ママ！ 情報で助けると言う最低限の義務は果たしたので、後は任せる！ そして僕は！ 早急に！ 隠れるツ!!」

「いやはえーな!! 逃げ足はえーな!!」

ラーレはそう言うのと、先ほどと全く同じようにして、木陰で縮こまった。

その速さたるや、カイリユウの「しんそく」すら目ではない。

「ともあれ、これをやったのはコイツで間違いないみたいだな……!」

「野生ポケモンでこれだけの威力……油断せずにいきましよう!」

身構える時間さえ、与えてくれないらしい。

鼻息を荒らげ、目をかつ開き、牙を剥き出しにしながら、雄叫びと共に大出力の電撃を放つ。

読み通りの「かみなり」だ。だがダイは怯むことなく、ビームじみた光線に向かってモンスターボールを投げつけた。

「やりようはあるさ、ゼラオラ!」

電光ポケモンには、迅雷ポケモンを。飛び出した獣人「ゼラオラ」が、かみなりを真つ向から受け止める。

凄まじい音を轟かせながらも、吸引の要領で全身に電気を取り込み、無かったことにした。

「特性「ちくでん」、お前がでんきタイプで良かったよ!」

「なんと、それはゼラオラじゃないか!? 現行凶鑑では生息地不明になっている超希少種ツ!!! 後で写真を撮らせてくれ! そして願わくは専用技のプラズマフィストを見せ!」

「気が散るから後にしてくれっ!!」

「エルレイド」、あたしたちもいくわよ!」

次ぐ反撃は、シイカを守る騎士「エルレイド」が請け負う。

大技の隙を衝くよう急接近、手刀を滑らせ出す技は「ドレインパンチ」。

「そんな!」

「あいつ、止めやがった……!」

それを牙で啞えこみ、後肢で踏ん張って押し止めた。

「焦らないでエルレイド！ ダブルチョツ——」『ルアアアアアアア
!!』

指示などさせない。そのままぶん回し、間近の木に激しく叩きつけ
る。

頭を打って前後不覚になった一瞬を、獣は決して逃さない。

「まずい、ゼラオラツ！」

迸る三度の雷鳴。割り込んだ迅雷。

まばたきの間にエルレイドを抱えて、再びダイの元へ戻る。

残るのは杭で貫き折られたような樺色と、鼻をちぎりかねない焦げ
臭さだけ。犯行の証明は完了だ。直撃したらと思うとぞっとする。

「また助けられました……、ありがとうございます」

「大丈夫。それよりも」

「はい……一筋縄じゃ、いかないですね」

「それもそうなんだけど」

「？」

「やっぱりおかしいんだ、様子が」

ダイは、倒すことにはかりを気を取られている訳ではない。

ジム巡りで培った観察眼が、現状に散りばめられた様々な要素を捉
え、寄せ集めていた。

「効率が悪すぎだ……ポケモン一体を倒すにしたって、何もあんな威
力で技を出さなくなっていた。あの目と攻撃は、明らかに俺達に憎し
みをぶつけてる」

「何か、そういう切れる理由があるんですか？」

「俺さ、人へ敵意を向けるポケモンってやつを見たことがあるんだ
……だからそういうのには敏感っていうか、なんか、わかるんだ」

とりわけ彼は、生物の証明たる「心」を奪われ、戦闘マシンにされ
たポケモン『ダークポケモン』への知見もある。

「なんで俺達を、こんなに目の敵にするんだらう……」

ゼラオラが構える後ろで顎に手を当て、あれこれと思考。

だが罫が明かない。飛んできた電撃がまたも弾ける。それを合図
に、ダイは隣り合うシイカの方を向いた。

「なあシイカ、俺達であいつを捕まえないか？ ひよっとしたら、何かわかるかもしれない」

「え!? そんな、撃退できるかすらも怪しいんですよ……!?」

「わかってる。けどさっきのアブソルといい、峡谷のポケモン達の気が立っているのは目に見えてわかる。多分何か原因があつて、俺達はそれを知る必要があると思うんだ。……勘だけど」

「結局勘なんですか!？」

「頼む。作戦は俺が立てるし、言いだした以上は絶対になんとかするからさー!」

ルクシオのとくせい「どうそうしん」により、雷の勢いが増す。

事は一刻を争う――。

02. 岩窟王

「……じゃあ、信じますよー!」

ダイの作戦を聞き入れたシイカは、短くそう言った。続く指さしが示すのは、エルレイドによる唯一の遠距離攻撃。

「サイコカッター!」それは向かってきた「かみなり」を打ち消すように放たれる。

薄桃の三日月は忽ちに爆ぜ散り、残滓として数多の光の粒を置き去った。

「食いついた……! エルレイド!」

ルクシオが己を睨み付ける瞬間を、逃さない。声を合図に主を横抱きし、貼り付けられた視線を手繰り寄せるように、一気に側面へと回り込んだ。

次々襲い掛かる閃光に足跡だけ食わせて、深い森を駆け抜ける。

距離は一定、雷を避けられる程度に。それでも、愛想つかされない存在感を保てるまでに。

バリン。再び木を焼き打った。鳥が轟雷に飛び退いた。木の葉を落として枝の間から抜けた。

「今です!」

「おうよ!!」

直後、突っ込む迅雷。

一瞬にして感じた気配に振り向こうが、稲光には悉くが手遅れ——そんなこと、使い手が一番知っていることだろう。

ゼラオラはルクシオの首が回り切らない完全な死角から進撃し、一息にその躰にがばつと組み付いた。

触れるな。弾けて逆立つ体毛が、自身を拘束する獣人へ電撃を流し込む。

『!』

だが通らない。特性『ちくでん』は、絶好調だ。

「っへ、捕まえたぜ……!」

『ヴァア! ヴァルルルヴァアアツ!!』

「さあ、我慢比べといこうじゃねえか！」

“かみなり”を放つための電気を、密着状態のちくでんで片っ端から吸収していく。

捕獲となれば長期戦は免れない。そんな中で大火力かつ速い電撃を回避し続けるのは、理論上不可能に近い。そもそも山火事さえ想定出来てしまう。

そこでダイが捻り出した作戦は、

『フルパワーのかみなりを誘発して、ルクシオの消耗を早める』

というものだった。

シイカが注意を引き付け、生まれた隙にゼラオラが取り付き『ちくでん』で自由を封じつつ電気を食う。そうして安全にエネルギーを枯渇させ、弱ったところをボールで捕える。

全てはゼラオラの肉体の電気の許容量次第だが——果たして。

「まだまだいくぜ！ お前は、こんなもんじゃねえよな!!」

不安げに見つめるシイカに、耳を塞がせる出し抜けの落雷。ルクシオが呼び出したものだ。

「ダイさん、やっぱり危な——」

「大丈夫さ——」

「へ……？」

「なんとってこいつは、俺のポケモンだからな！」

強烈なフラッシュでぶれる視界の中でも、ダイは決して揺らぐなかった。

ゼラオラも主人と全く同じ表情をして、もがいて転げるルクシオを離さない。

真上に雷雲。唸る轟音。恐らく、これが最後にして最大の一撃になるだろう。

「ダメ、特大のが来る！」

いくら吸収と言えど、生物だ。限界がある。

見上げるシイカが一旦退くことを促しても、まるで聞き分けの無い子供のように聞かない。

「——ここだ、ゼラオラッ!!」

だがそれこそ、何より頼もしい確信の裏返しで。

ダイの指定したタイミングに寸分の狂いもなく合わせて出す技は
「プラズマフィスト」。

地面に指を突き立て、そこからこれまで飲み込んだ電撃を惜しげもなく吐き出した。

「そうか、アースか！」

「ち、地球ですか!？」

「そうじゃない！ 電気を地中に流し込み、蓄えた分を発散したんだ
！」

「よくわかんないですけど、だ、大丈夫なんですよね?！」

「ああ、これならひよっとするぞ……!！」

いよいよもって大地を割ってしまいそうな音と衝撃が、ゼラオラに直撃した。

吸い切るか、爆発か。ばりばりと継続する感電状態は、彼を確かに苦しめる。食い縛る歯から漏れ出る煙と呻きとが混じり合って、見る者の不安をかき立てる。

「いっけええええええええええええええええ!!！」

されど、ダイは最後まで折れぬまま叫んだ。

誰も無茶とは言わない。無理とも唱えない。後退など有り得ない。爆ぜ散る輝きの中で望めた横顔は、確かに『突き進む者』のそれであつた。

「電撃が途切れたぞー！」

「シイカ、頼む！」

「了解っ!!！」

ゼラオラが素早く飛び退く。即ち押さえ込む必要がなくなったという事。

動きが鈍ったルクシオへ、真つ直ぐで全力投球されたハイパーボールがぶつかった。

ルクシオを飲み込み、始まる揺れ。

固唾を飲んで見守って、一度、二度——三度。

「……うん、いいコントロールだ」

球体が最後に一瞬だけ赤く煌めくと、ゲットが完了。ダイは確認するやいなや、その場で額の汗を拭った。

「すごい、ほんとにやりきるなんて……」

「だから言ったろ？ なんとかする、ってさ」

「ま……ギリギリだったけど」疲れきったゼラオラを戻して見せるは、緊張が解れた後の苦笑い。

先程のゾロアを扱った手際の良い離脱に、今回の特性を熟知した攻撃をしない捕獲、てきぱきとした状況判断とリスク管理……どれもこれも、自分では逆立ちしても成し得ないことだ。

「それじゃ、行くか。お疲れのルクシオをいきなり調べてやるのも可哀想だし……回復までの時間で、探索を進めよう」

それを鑑みて、シイカは思い知る。

この人は平然としながらも、沢山の修羅場を潜り抜けているのだな、と。

自分の何倍もの歩数を進んでいるのだな、と。

「あたしも負けてられない」——背中にぼんやり浮かぶ少年のバックグラウンドを薄々感じながら、密かに意気込み、歩き出す。



探索は続いていく。

テラキオンを探しながら、おそらく何かしら起きているであろう峡谷内の状況も調べなくてならない。

ポケモンレンジャーみたいだ、なんて冗談めかしてみるものの、あんな強さの野生ポケモンがごろごろいるこの場に於いては、欠片も笑っていられる状況ではない、というのが正直なところ。

先頭のポケモンよりも弱いポケモンが避けていく『ゴールドスプレー』を、ダイのエース『ジュカイン』に吹き付けて進む崖路。下を見ても下が無い……凝視していると恐怖で心臓が飛び出そうになる。

車一台分の幅しかない道を歩みながらも、会話は減らない。

ラーレはところで、という切り口から、シイカへと言葉を投げた。「シイカちゃんのその、赤みがかった茶髪と、青基調の服装というコーデイナート……どこかで見たなと思ってたんだけど」

「あ……わかりますか？」

「むむ、やっぱりそうかー」

びしりと指をさす。それはもう、オーバーなほどに。

オタクならではの挙動にびくっとして振り返るダイとジユカインが何のこっちゃと相好で語ると、返ってくるアバウトな解説。

「これはね、『ケルディオ聖剣伝』の主人公『ケルディオ』の服装なんだ！ 全てを守るために戦った、清く正しく美しい騎士のようなポケモンをモチーフにしている、ということさ！ いやあく本当にそっくりだ！」

「ち、ちよつと、そんな大声で！ 確かに意識してますけど、さすがに恥ずかしいですよ……！」

指で形作られるフレームに収められながら、頬を赤くして焦る。

シイカはそのうち一人小首を傾げるダイに気付いて、そういえば、と噛み砕いて説明した。

「実はラフエル地方には、色んな昔話があるんです。ラフエル英雄譚だけじゃなくって……本当に色々。世界を巡る大きなものから、ちよつとした人やポケモンの身の周りを語るだけの小さなもの——ありのままを描いた実話だったり、夢が込められた作り話とか」

「じゃあ、そのケルディオ聖剣伝ってのも、その昔話の一つってことか？」

「その通りだね。人とポケモンが戦争を繰り返す辛く悲しい世界の中で、ポケモン『ケルディオ』が逞しく成長していく姿を描いている。彼が争いとどう向き合い、何を為していくのか……というのが骨子だ。結末は涙なしには見られないよ」

「へえ……よその地方から来たもんだから、まったく知らなかったな」
ラフエルでそれなりの時間を過ごしてはいるが、思えば伝承というものには触れてこなかったもので、ダイとしてはとても新鮮で。

「でまあ、とりあえず、シイカはそのケルディオに憧れてるってわけ

か」

「はい。彼はどんな時でもその目に光を宿して、最後まで自分の道を駆け抜けたんです。空に折れない剣を掲げながら、希望を求めてどこまでも、どこまでも……」

「なるほどね、だから聖剣か」

「それに小さい頃、あたしは彼を見ました。忍び込んだメーシヤ王城の玉座で、確かに眠っていたんです。立ち去る瞬間、ちゃんと目も合いました。伝承上の生き物だから、信じられないかもしれないけど……」

「疑わないよ」シイカの語り口も、同様。

こんなにも無邪気に瞳を輝かせて饒舌に語られてしまったのは、否定のしようもあるまい。

尤も、するつもりも毛頭ないが——何より。

「ここで否定するような奴なら、多分、伝説のポケモン探なんてやらないよ」

「ははは！ 確かに、それもそうだ」

「皆さん……」

旅に出る。

彼を見て、そして魅せられ、彼女は決意を胸にした。

その日、彼に背中を押されたから、自分はここに立っている。

あの日見た彼の背中を追いかけて、自分は現在いまに至っている。

「今から僕らが会うのは、ケルディオではないけれど……どんな伝説だって、記した先人たちは実在を信じていたはずだ。だからこうして、わざわざ未来に書置きするよう記したんだと思う」

『ありもしないものを求めるな』と大人は指さすし、笑うけれど。

在りし日に聴こえた己の胸の鼓動を否定することの方が、ずっとずっと馬鹿な真似で、笑い種だろう。

「故に。後の世を生きる僕らが、存在を証明してやろうじゃないか」

有無は重要ではない。大小だって然り。

いつだって大事なものは、この足を進ませてくれるかどうか。そして魂が震えるかどうか。

「いない」なんて決めつけるよりも「いるといいな」と思った方が、うんと楽しい。

画面越しの世間話より、紙面越しの噂話より、人間越しの土産話より、水晶体越しの実話がいい。

「目指せ、ツーショット」

だって、それこそが自分だけの物語になるんだから。

ラーレという男は頼りなくも、そんな子供の夢を支持する、稀有な大人であった。

得意げに持たれたカメラは、一体どれだけのポケモンを捉えてきたのだろう——二人はそんなことを考える。

日が昇りきる頃。崖路を伝って、ようやく川辺の方に降りた。

柵もないために、落ちまいと神経を長々と使い続ける時間を終え、一息つく。

休憩もほどほどに、再開される探検。

谷間とあつてか、いよいよ人の営みが微塵も感じられない域にまで来た。先程まで遙か遠くに望めた町も当たり前に見えない。孤立した錯覚さえ感じるほどだ。

流水の音を背に、傾いた森林の中を歩く。『せせらぎ』なんて柔らかい表現が出来れば良かったのだが、生憎上流、そんなに優しい筈もなく。

「だ、ダイくん！ シイカちゃん！」

互いに視認出来る程度に離れて散策していた折に、大声を出したのはラーレであった。

何事かと駆け付けた二人であったが、彼から詳細を聞くまでもなく、察する。

「これ……！」

「……いかにもって、感じだな」

目の前にあるのは、洞窟。

入り口は大きく、ライトで照らせど先が見えない奥深さ。

「何もない」だなんて考える方が不自然なぐらいの仰々しさがある。

三人は暫く顔を見合わせた後、ゆつくりと立ち入った。

「広い……規模がまるでわからない……」

「脱出は任せてくれ。いざとなったら、あなぬけのヒモがある。戦闘は君ら頼りになるが……」

「その気ではいる。けどこの状況で、アブソルの時みたいに集団で襲われたら……ちよつと危ないかも shouldn't」

「あ、あまり怖がらせないでくれ……」

「ごつごつとした足場を探り探りで越えながら、緩やかに進んでいく。」

光はとつくに届かなくって、エモンガとゼラオラとハンドライトだけが助けた。

何かがいるような、いないような、気配があるような、ないような——
—— 釈然としない不気味さだけが、ひたすらに三人を包み込む。

胸の奥で渦巻く気持ち悪さとうすら寒さに支配されかけた頃、突き当たった壁。

それが意味するところは、最深部まで来た、ということ。

ここまで誰も居なければ、何もない。風もなければ音だつて。

静寂を通り越した無。そこはまるで外界から隔絶されているようであつた。

さらに言うならば、なんだか物質的な繋がりを拒む、結界じみた——。

「……剣？」

それは、調べているうちに見つかった。

金属のような光沢を持った、青色の片刃剣。丸みを帯びた立派な岩石に深く突き刺さっており、易々と抜けないようになっていた。

そしてそれに掛けられた、いくつもの花輪。カラフルで、かつ匂いもある。生花だ。

「枯れてない、つてことは」

「最近の痕跡だ……！ 凄いで、やはり此処は何かがいる……！——」

「一体誰が……、それに、何のために」

「それを知るために、調べるのさ！ エモンガ、ゼラオラ、そいつを照

らしてくれ。写真を撮る」

ぱしやり、ぱしやりとカメラを動かす傍らで、壁面の違和感にも気が付くシイカ。

——絵が刻まれていた。

筋彫りした上に、何かしらで作られた顔料を流し込んである、古代ラフェルにて主流だった手法。

「これは、戦い？」

そう言い、目を細めて思考するシイカの前にある構図は、獣と武装した人々が険しい顔で向き合う構図。

周りには沢山の炎が散りばめられている。

「みたいだな。……泣いてる」

ダイが見つめるのは、涙を流してその炎に背を向けるポケモン達。逃げているのだろう。

一頭のポケモンが先頭を切っている。四つ足の、立派な一本角を持ったポケモンだ。巨岩を砕いて道を作る姿が、逞しい。

「これ、なんなんでしょうか」

「わからない。おまけに、文字もところどころに書かれてる。読めないけど……」

「何にせよ、一つだけ間違いなく言えることがある」困り果てる二人へ、写真を撮りながら回答するラーレ。

「ここは、遺跡だ」

「つまり……？」

「昔に何かがあった場所、ってこと」

その言葉を理解するのに少しの時間を要したシイカだったが、ダイの助けを得て腑に落とす。

「これは古代ラフェルで使われていた『ラフェログリフ』という文字だ……刻み目の劣化が酷く、その場での解説こそ困難だが、まず間違いないだろうね」

「でも、変じゃないですか？ この壁画をそのまま読み取れば、古代ラフェルには戦争があったってことになりますけど……そんな話、歴史の教科書にはなかったです」

「冒険者は冒険を通し、己が見ていた世界の小ささを知る。同時に星の大きさを理解する。シイカちゃんだって知ってるはずだ、見えてる世界が全部じゃない、と」

「……確かに」

待ったをかけるシイカへ、さらに待ったをかけた。

世界に対して、命一つはあまりにちつぽけで、儂い。きつと用意された知識の何億分の一も理解出来ないままに、その一生を終える。

であるならば、深みに沈んだ知識の一つに、自分たちが知り得ない残酷な真相があつたとしても、まったく不思議ではなくて。

だが何より驚くべきは、人の手——つまり文明が入り込んでいない場所に、こうして文明の跡があるという事実だ。

「現状、詳しいことは言いきれないが……ここに『高度な知性を持つ者がいる』というのは、确实だ」

それが人なのか。或いはポケモンなのか。

どのみち手掛かりであることに、違いはない。

一通り遺跡を保存し終え、最後に一枚、青い剣を別角度から撮ろうとした時のことだった。

「(……足跡?)」

それはレンズ越しでも、ラーレを不審がらせるには十分だった。

草葉を踏み越えた際の汁つゆだろうか。濡れた靴で作られた足跡が、剣を立てる岩石に残っていたのだ。

おかしいだろう。

自分たち以外に、人らしい人は見ていない。そんな気配だつて微塵も感じなかった。

そもそも出来て新しい。ここに来て立ち去つたならば、ちゃんとすれ違はずで。

やはり、やつぱり異様だ。これもまた一連の出来事と無関係ではない。

ポケモン達の敵意が強烈で。

それは人間に向いていて。

自然に立ち入る自分たちはよそ者で。

よそ者を憎むのは何かを被^{こむ}っているからで。
被^{こむ}るほどの何かをする者がいるとするならば、それは――。

「ラーレさん!!」

暗黒を、さらに強い暗黒が切り裂いた。

突如として飛んできた闇色のエネルギーは、一番狙いやすかつた男の背中に襲い掛かる。

「『プラズマファイト』!!」

ゼラオラが割り込み既のところまで打ち消すと、一瞬にして誰もが臨戦態勢に入った。

「何……!?!」

「うわあああああああああああああああつ! 目を閉じる直前、僕の前に

「あくのはどう」が! 「あくのはどう」があつたツ!! 当たつたか!?! 当たつたのか!?! やられたツ!! 首はあるか!?! 僕の首は繋がっているかー!!?!」

「!!?!?!」 てかそのヘタレっぷりなんとかしてくれ
ラーレはサンドのように丸くなって、ダイとシイカの後ろで伏せた。

飛んできた攻撃は「あくのはどう」で、正解。

「また野生!?! 逃げ場がないこんな時に……!」

「だったら、よかつたんだけどね」

背後を狙い撃つ狡猾さに、しっかりと人体の首へと向けた正確さ――ダイだけはそれらに気付けた。

旅の合間に幾度と見てきた、ダイだけは。

「……違ふよ、多分」

行動一つとっても、野生では到底誤魔化せない計画性。及び隠しきれない趣。

二人の視界の先で、数多の光が灯った。文明を象徴する、人工の光。足音が大きくなる。付随してダイの横顔は渋くなって、苦笑いが深まって。

どこにしようが不思議じゃない。何故なら彼らは、どこにでもい

て、どんなことでも成してしまうのだから。

「変なモン入り込んでんなどと思つたら……んだよ、お前か」

「……最悪だ……」

それは、誰かを地獄に叩き落とすことも。

「勘弁しろよ……いい加減テメーのツラも見飽きたぞ」

「一番会いたくねえ奴と、一番会いたくねえタイミングで会つちまつた……!」

踏みにじられるべきでないものを踏みにじること、例外ではない。

「どうしてくれんだ、オレンジ色」

「クソツタレ——バラル団!」

纏う衣は灰塵の色。己たちが唯一残す、モノの色。

全てを踏み潰す集団が、*「グラエナ」*を率い、彼らの前に立ちはだかった。

「バラル団!? なんでもここに……!」

「んなもんこつちのセリフだろうが。ガキ共が揃いも揃って、邪魔くせえ……」

身構えるシイカに視線一つ合わせず、小指で耳を掻きながら、一団のリーダーである男『ロア』は返す。

「……お前らも、伝説のポケモン目当てっつてか」

「知ってんじゃねえか。じゃ、べらべらお喋りする必要もねえな」

点同士が繋がった。

野生のポケモンは、自分たちのテリトリーに踏み入った彼らを追い払おうとしていたのだ。

ダイたちが襲われたのも、恐らく連中の仲間と判断されたからであろう。

「やれ」

「こんな奴らと一緒にされるなんて……まったく心外だぜ!」

戦闘開始。ぶおん、と歪む空間の音が合図。

「いけ、グラエナ!」複数のしたっぱがそれぞれ指示を出すと、一斉に*「あくのはどう」*が放たれる。

「ゼラオラ、もういつペン プラズマフィスト！」

「ギャロップ、ほのおのうず」で打ち消して！」

シイカはあることに気付く。

「今、打点の高さが私たちに合わせられてた……？」

「気を付けろ。あいつらがやってるのはポケモンバトルじゃない。ポケモンを扱ったただの暴力だ……トレーナーだって平気で狙う」

それは、噂だけで聞き知っていた存在と相対して、初めて理解出来たことだった。

「そういうこつた。テメーは初めて見るツラだが、こつちからは加減しねえ。そのオレンジ色は俺らの常連でな、関係者はまとめて叩き潰せて注文入ってんだ。恨むなら野郎を恨みな」

「つ……ほのおのうず！」

ギャロップが二発目の「あくのはどう」を相殺するも、対応は後手後手。

自身もターゲットに含まれる違法戦闘の経験がないので、仕方がないといえそうだが、ここでは間違はなく仇になっている。

遠距離からじりじりと、何度も何度もねちつくく攻めてくるグラエナの群れ。逃げ場がないという前提条件を最大限利用して、消耗戦を仕掛ける腹積もりだ。

「これじゃじり貧……！ 行って、エルレイド！」

そんなじれつたくて汚い真似は、絶対に許さない。

シイカはエルレイドを先行させた。狙いは言わずもがな。

グラエナとしたっぱの壁を一点突破せんと、ドレインパンチを放つ。

飛び掛かって構えを取った瞬間に、そのフォーメーションに乱れが生じた。

標的になったグラエナが飛んで避ければ、ロアへと繋がる一本道が完成。

「かかったわね！」

ボールを構えた。本命はこつち。

「お願い ジャローダ、捕まえて！」

リリースした瞬間には、グラエナを抜き去っていた。

槍が如き速い突進を以て道をこじ開け、勝負をかけるのは、シイカの手持ち一番のスピード自慢「ジャローダ」だ。

脇目もふらず、真っ直ぐにロアへと向かっていく。

戦いの基本は命令系統を断つこと。要するに、一番強そうな奴を狙う。

「——ダメだッ!!」

「……!?!」

「正解だ」

シイカは目を白黒させた。

次には、ジャローダが振じ伏せられる光景が広がっていたからだ。

気だるげに棒立ちするロアの前に、影があった。

「集団と喧嘩する時ア、真っ先に一番強エ奴ヤツて、取り巻きビビらせて戦う気を削ぎ落とす……鉄則だわな」

手があつて、足があつて——拳の記号を持った人型ポケモン「ズルズキン」の、影が。

「けどな、そうする時に一番役に立つのアなんだと思う?」

「何を言つて……」

「一番弱エ奴さ」

「くそ——!!」

何が起こつたか、わからなかった。

ダイに突き飛ばされたと思つたら、尻もちをついていて。

「——ダイさん!!」

尻もちをついたと思つたら、ダイは「ポチエナ」に腕を噛まれていて。

ぎりり、と食い込む歯の音。流れて衣服に滲む血も、漏れる息も、生ぬるい。

シイカのギャロップが速やかに火を放つと、ポチエナはダイから離れてロアの元へと逃げ帰った。

「そんな……! ごめんなさい、あたしのせい……!」

「大丈夫、大丈夫……つて……ッ」

「災難だな、オレンジ色。ヒョッコ庇って名誉の負傷たあ、随分とツキがねえじゃねエか」

「でも、なんで……あんな一瞬で、ポチエナが近づいてこれるわけ……！」

「っ……多分、ずっと待ってたんだ。この暗闇の中でポチエナを忍ばせて、トレーナーを襲わせる瞬間を……」

ハンカチで血を押さえる。相手が小型ゆえに傷こそ致命的ではないが、痛みは別問題だ。

「勝ちを確信した瞬間つてのは、どいつもこいつも警戒が緩い。……まだ終わってもねエのに、だ」

「くっ……卑怯者……」

歯噛みして罵倒するシイカを、ズルズキンはげたげたと嗤った。そうして文字通り伸びてしまったジャローダを眼前に投げ捨て、中指を立てる。

「勝ちやいいのさ。正々堂々負けてくたばるよか、うんとマシだ」

「っ……！」

言葉もテンションも、まるで噛み合っていない。

同レベルの間でしか争いが起こらないように。次元が違えば話にならないように。ロアは一つ上の立ち位置から、シイカの言葉を冷淡に封じる。

「いいかクソガキ、俺らがやってんのア殺し合いだ。綺麗も汚エもあるか」

「うわあああああっ!!」

容赦ないハンドサインが、再びポチエナを動かした。

今度は丸腰のラーレ目掛けて、牙を剥く。

「ぜ、ラオラっ！」

ダイは荒い呼吸をして片膝を付きながらも、ゼラオラに処理させる。

「頑張るな。さっさと倒れちまった方が楽そうなモンだが」

「冗談よせよ。一番強い俺がぶっ倒れたら、どうしようもないでしょ……！」

「そうかよ……んじやま、せいぜい足掻くこつた」

「ちくしょうッ……!」

背後は行き止まり。前方はバラル団。

包囲され、数は目測でも八はいる——連携も思いのままだろう。

誰でも的にできてしまうよりどりみどりで、仲間の二人はアウトサイドーとのバトルは未経験。となれば底いながら戦う必要がある。

「(……無理だろ、そんなの)」

そう、手負いでそんな芸当は不可能だ。

ならばどうする。考えろ。

ゾロアで自分たちの幻影を作り、それで気を引いて逃げるか？

違う、手品のタネは披露する前に予め用意するものだ。

手持ちの火力を集中させて強引に突っ切るか？

物量で止められればおしまいだ、リスクが高すぎる。

「(わかんねえ、どうすりゃいい……!?)」

追い詰められるだけの攻防の最中、シイカの足元でこつん、と音が鳴った。

確かめるように光を当ててみれば、ハイパーボール。ホルダーから落ちてしまったのだろう。

「……………!」

その球体がひとりでに開いたのは、拾い上げようとした刹那のこ
と。

飛び出した四足獣は、盛んな血気に任せて“ほうでん”を繰り出

し、複数のグラエナを一度に後退させる。

「ルクシオ……? どうした、いきなり!」

「わ、わかんないです! 勝手に出てきて……………!」

「なんだ? 一匹増えたところで、なんだっ」

ル

オ

オオオオ

ン!!

「あ……………」

突然の遠吠えは、居合わせる者の会話ばかりでなく、思考の流れま

でもを遮った。

しかし暫くして知るの、小さな体から放たれる大きな咆哮。ただの、それだけ。

何も起きないじゃねえか。副産物の沈黙をどかして、構え直す。それからだ。

「——ッ!!?」

——地響きが身を震わせたのは。

「こ、今度はなんだーっ!!?」

ズン。

「で、でけえ……!」

ズズン。

「でも地震、じゃない……っ!」

継続的ではなく、断続的。

立っていらなくなるほど大きなその縦揺れは、まるで巨大な生物の足音のようで。

呼吸リズムが、崩される。心音を、乱される。

鼓膜が縮み上がるような感覚、接近の証明。

「チツ……おい! 外はどうなってやがる!」

『こちら洞窟前! 奴が現れました、現在交戦中! 至急応援を

——ぐあああっ!!』

何かが来る。

「……!?!」

強く、それでいて恐ろしく険しい、何かが。

『助けて班長おおおおおおおおッ!!!』

岩壁に罅。通信が次々に途絶えていく。

『こちら探索班後方! 突破されました! 間もなくそちらに——』
焦燥に駆り立てられたところで、もう遅い。

「

—

ヴ

オ

オ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!』

大自然は、既に怒りの剣を抜いてしまったのだから。引きずったバルル団たちのポケモンをぶっ飛ばしながら、その存在は乱入した。

雄大な大地の具象化と唱えられる、石灰色の肉体。大木のように立派な四本脚は、一歩踏むだけで悉くを震わせる。前向きに生え揃う二本角は見るからに強靱で、宝石にも似た輝きを放っていた。

ダイも、シイカも、ラーレも、この獣を見たことなど一度もない。されど正体を理解できてしまうのは、恐らく彼が放つ覇気のようなものの所為なのだろう――。

圧倒的な巨軀を以て目の前で存在感を放つそれは。そのポケモンの名は。

「―― ヲテラキオン！」

裂けるように避けたバルル団は三人から目を離し、即座にターゲットを『岩窟王』の異名を冠する獣へと切り替える。

「よう、探したぜ」

『……………』

「こうやって出てきてくれるってことは、俺ら遊んでくれるってことだよ、なッ！」

畳みかけるグラエナ達の「かみくだく」。だが――。

「な、なんだ！ なぜ止まる!?!」

「どうしたの、攻撃なさい！」

眼光一つで、黙りこくってしまう。

無論、近づく意志はある。それでも恐怖は、肉体を裏腹に固まらせてしまうのだ。

「チッ、ヒヨリやがって……ズルズキン！」

ロアは舌打ちをして、手持ちを差し向けた。放たれる「とびひざげり」は有効だ。しっかりと相手の方へと向かっていくが、「な!?!」

届くより先に、あっさり角で弾き飛ばされる。

不定形の光の刃で延長された二本角は「せいなるつるぎ」と呼ばれる技で。

「目標、止まりません!」「化物が……!」近づけないなら飛び道具を出すまで。発される「あくのはどう」も全く通じず、有象無象として一方的に薙ぎ払われていくグラエナ。

「凄い……単騎で、ここまで。これが伝説のポケモン……!」

猛々しい叫びと共に無双する光景は、圧巻と言わざるを得ない。

「お前が、呼んだのか?」

ルクシオに訊ねるものの、返事はない。ただ猛威を振るう岩窟王を、険しい顔して見つめるだけ。

遠巻きで呆気にとられている二人の後ろで、ここぞとばかりにラレレが起き上がった。

「二人とも、チャンスだ! ルクシオがどういう意図で彼を呼び寄せたかは知らないが、僕らにとっては僥倖……! 彼を利用して、この状況を打開しよう!」

「か、簡単に言うけど、俺達の敵に回らない保証なんてないだろ!」

「それでもだ! 最後に見えた希望さ、やるしかない!」

「やるのはあたしたちなんですけど……!」

それは、状況打開の兆し――。